

〔論 文〕

パーソナリティ特性とタッチング行動の 関連性に関する研究¹⁾

曹 美 庚

アブストラクト

本研究は、パーソナリティ特性とタッチング行動の関連性を検証することを目的とする。特に、タッチする側に焦点を当てている。Dorros et al. (2008) とは異なり、異性のパートナーを除いた両親や同性親友との身体接触に分析の焦点を合わせることで、人々のより一般的な身体接触行動の究明を図る。日本の大学生202名と韓国の大学生212名を対象とした質問紙調査の結果から、パーソナリティ特性のうち外向性と情緒不安定性がタッチ性向に対して正の影響を及ぼすことを明らかにすることができた。また、先行研究で取り上げられてきた文化や性別要因をも考慮した重回帰分析からは、パーソナリティ特性のうち、とりわけ外向性がタッチ性向に及ぼす影響は文化の影響よりは小さいものの、性別の影響よりは大きいことが示された。さらに、パーソナリティ特性というミクロ要因と、文化や性別といったマクロ要因を同時に分析枠組みに含めることで、人間のタッチ性向のかなりの部分が説明できることも明らかとなった。

Key words: propensity to touch, Big Five, extraversion, touching behavior, cultural differences

キーワード：タッチ性向、パーソナリティ特性、外向性、身体接触行動、文化差

I 目 的

日常生活において、外向的で社交的な人ほど感

情表現がより豊かで、なおかつ積極的である場合が多い。感情表現には一般に、言語によるコミュニケーションとともに非言語コミュニケーションが伴うが、App, McIntosh, Reed, & Hertenstein (2011) は非言語コミュニケーションのチャネルとして身体、顔、タッチといった3つの手段を挙げている。外向的で社交的な人ほど、コミュニケーションをとる場面でこれらすべてのチャネルを積極的に活用している可能性が高く、したがって外向的で社交的な人ほど非言語コミュニケーション・チャネルの一つであるタッチの使用頻度も高いことが推察される。

タッチに代表される身体接触については、これまでも文化による相違や性差などがよく取り上げられてきた。前者の研究は、高接触文化 (high-contact culture) と非接触文化 (noncontact culture) の下で、人々の接触行動に違いがみられることを示すものであり (DiBiase & Gunnoe, 2004; Hall, 1966; Hall & Friedman, 1999; Jourard, 1966; Lustig & Koester, 1996; Mazur, 1977; Remland, Jones, & Brinkman, 1995; Thayer, 1988)、後者の研究では、同じ文化の下であっても、男女間には身体接触行動に差があることが示されてきた (Barnlund, 1973, 1975; Buck, 1979; 曹 2008, 2010, 2013; DiBiase & Gunnoe, 2004; Henley, 1973, 1977; Jourard, 1966; Stier & Hall, 1984)。これらは、文化および性別といった2つの要因によって人々のタッチ行動がかなりの程度説明できることを示唆するものである。しかしながら、文化や性別はいずれも外部的なマクロ要因であり、人の接触行動を外部的な要因だけで説

明することには自ずと限界がある。そこで、本研究では、人間の内的要因に関わるパーソナリティ特性に注目し、人の接触行動と深い関わりを持つパーソナリティ特性を抽出した後、マクロ要因としての文化や性別と比較した場合、特定のパーソナリティ特性が接触行動を説明するのに相対的にどの程度の説明力を有するのかを明らかにする。要するに、本研究の目的は、パーソナリティ特性とタッチング行動の関係を探究することによって、従来から注目されてきた文化や性別とともに、パーソナリティ特性が人の身体接触行動の一定部分を説明できる可能性を明らかにすることである。

パーソナリティ特性に関する研究と身体接触に関する研究はこれまでとくに関連性を持たずに進められてきているが、本研究では両研究領域を結びつけることによって新たな知見を導き出したいと考えている。その際、男女間、あるいは異なる文化間でタッチ性向の度合いにどのような違いがあるかを併せて考察することで、タッチ性向、ひいては人の接触行動への理解を深める。

パーソナリティ特性については、これまでに膨大な関連研究が行われた結果として、Big Five性格特性理論が確立されてきた²⁾。この理論では、人間の基本的性格は、外向性(extraversion)、情緒不安定性(neuroticism)、開放性(openness)、誠実性(conscientiousness)、調和性(agreeableness)といった5因子から構成されるとしている。性格特性の操作化を巡っては、5因子を測定する際の容易性を考慮したBig Five短縮版がこれまでにいくつも提示されてきた(Crede, Harms, Niehorster, & Gaye-Valentine, 2012; 並川・谷・脇田・熊谷・中根・野口, 2012)³⁾。並川ほか(2012)の短縮版もそのうちの1つであり、本研究においても5因子の測定に並川ほか(2012)のBig Five短縮版を使用している⁴⁾。

一方、身体接触に関する研究は、親密な関係であるほど接触の機会が多く、接触部位が広いといった研究(Jourard, 1966)や自己開示度と被接触量との相関を取り上げた研究(Jourard

& Rubin, 1968; Barnlund, 1975)をはじめ、身体接触を楽ししさや温かさを伝えるツール(Pisano, Wall, & Foster, 1986)、関係発達と維持において好意や親密さを表現する要素(Boderman, Freed, & Kinnucan, 1972)、相互作用の際に不安を低減させるもの(Field, Seligman, Scafidi, & Schanberg, 1996; Drescher, Gantt, & Whitehead, 1980; 川島, 2007)、慰めや激励のメッセージ伝達手段(Drescher et al., 1980)などと捉えるポジティブな解釈がある反面、不安や不快感を与える身体接触(Whitcher & Fisher, 1979; 大森・五十嵐・和氣・巖島, 2012)、個人間の関係対立や不満を表す身体接触(Karney & Bradbury, 1995)などのように、ネガティブな観点から身体接触を取り上げた研究も見受けられる。

Dorros, Hanzal, & Segrin (2008)は、パーソナリティ特性と身体接触を直接結びつけた研究を行った。そこでは、305名を対象とした調査結果から、Big Fiveのうちの同調性と開放性が身体接触の肯定的な知覚を予測する重要な要因であることが明らかとなった。こうした結果は、相手からの身体接触を肯定的に知覚するか否かがパーソナリティによって影響されることを示唆するものである。Dorros et al. (2008)の研究は、パーソナリティ特性に関する研究成果と身体接触に関する研究成果を直接関連付けたところに大きな意義がある。しかしながら、そこでは、異性のパートナーとの間の身体接触を前提とした調査が行われているため、異性のパートナー以外の相手に対する一般的な身体接触行動を把握する上では自ずと限界がある。

本研究では、Dorros et al. (2008)とは異なり、タッチする側に焦点を当てている。さらに、異性のパートナーを除いた両親や同性親友を分析対象とすることで、より一般的な身体接触行動の究明を図る。そこでまず、個人のタッチ性向に影響を及ぼすパーソナリティ特性を明らかにした上で、当該パーソナリティ特性が文化や性別と比較した場合にどの程度の相対的影響力を持つのかに注目する。その過程で、パーソナ

リティ特性というミクロ要因と、文化や性別といったマクロ要因を同時に分析枠組みに含めた場合、このミクロ・マクロ統合モデルが人々のタッチ性向をどの程度説明できるかについても明らかにする。

II 方法

1. 質問紙調査

上記の研究目的を達成すべく、日本人大学生と韓国人大学生を対象とした質問紙調査を行った。日本の調査は、大阪府内にある2つの私立大学の大学生260名を対象に、2012年10月から12月にかけて行われ、229名から有効回答を得た。父親か母親がいないと回答したものを除き、202名(男子98名, 女子104名)が分析対象となった。平均年齢は19.54歳 ($SD = 1.17$)であった。一方、韓国の調査は、ソウル市とテグ市にある4つの大学の学生278名を対象に、2012年9月から12月にかけて行われ、249名から有効回答を得た。父親か母親がいないと回答したものを除き、212名(男子96名, 女子116名)が分析対象となった。平均年齢は21.18歳 ($SD = 1.74$)であった。

配布した質問紙は、2部構成となっており、個人のパーソナリティ特性を調査するパートと、日常生活の中での両親や親友との身体接触について尋ねるパートから成っている。前者については、並川ほか(2012)のBig Five 短縮版を用い、7件法でパーソナリティ特性を尋ねた。後者においては、人間の身体を24分割しているJourard(1966)の身体接近度質問票とそれを修正した、Barnlund(1975), Rosenfeld, Kartus, & Ray(1976), Nguyen, Heslin, & Nguyen(1975, 1976), Hutchinson & Davidson(1990)の研究をもとにした18分割図を用い⁵⁾、身体各部位に対するタッチの有無、ならびにその程度(少中多)を尋ねている。具体的には、人の身体図を提示した上で、父親、母親、同性親友、異性親友⁶⁾の各々に対して、18分割した身体部位に対して直近1年間どの程度のタッチがあったかを調べた後、「タッチ無し」に0, 「タッチ少」に1点, 「タッチ中」に2点, 「タッチ多」に3点を与え、18部位の得点をすべて合計することで身体接触の度合いを測定した(Figure 1)⁷⁾。その際、タッチの授受を行う相手の提示順番をランダムに配置することで、カウンターバランスがとれるように配慮した。

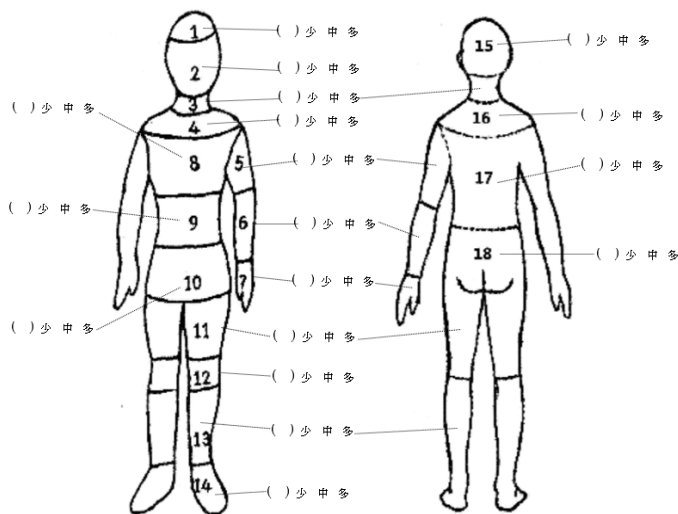


Figure 1 タッチ性向の測定に用いた身体図

2. 分析方法

2つの分析を行った。分析1は、Big Fiveのうちどの特性がタッチ性向に有意な影響を及ぼすのかを明らかにするための分析である。日本の大学生と韓国の大学生を別々に分析することで、パーソナリティ特性がタッチ性向に及ぼす影響に文化間で差があるか否かを併せて分析した。分析2では、分析1で抽出したタッチ性向に影響を及ぼすパーソナリティ特性が、これまでタッチ性向と深い関わりを持つとされてきた文化ならびに性別と比較し、どの程度の影響を持つのかを調査した。その過程で、ミクロ要因であるパーソナリティ特性とマクロ要因である文化や性別を同時に考慮したときに、これらの諸要因が個人のタッチ性向をどの程度説明できるのかについても分析を行った。

なお、Big Fiveの5つのパーソナリティ特性については、並川ほか(2012)の短縮版で用いられている6つ前後の項目の得点を単純合計することによって操作化を行った。内的整合性を検討するためにクロンバックの α 係数を算出したところ、日本の大学生の場合、外向性(5項目)で $\alpha = .78$ 、情緒不安定性(5項目)で $\alpha = .80$ 、開放性(6項目)で $\alpha = .74$ 、誠実性(7項目)で $\alpha = .76$ 、調和性(6項目)で $\alpha = .77$

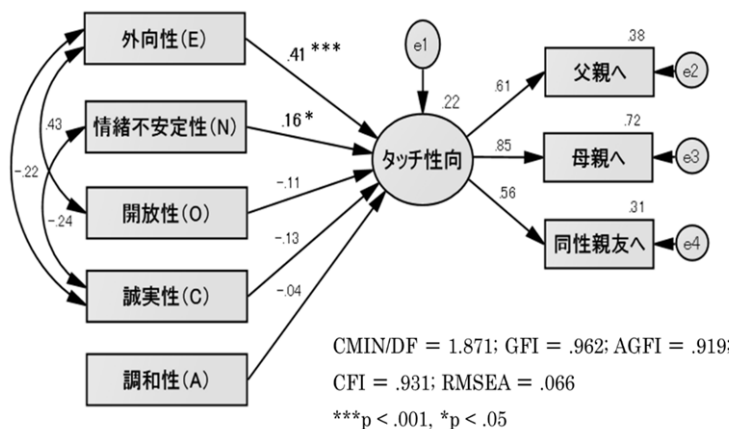
と十分な値が得られた。一方の韓国の大学生の場合も、外向性で $\alpha = .89$ 、情緒不安定性で $\alpha = .73$ 、開放性で $\alpha = .81$ 、誠実性で $\alpha = .75$ 、調和性で $\alpha = .72$ となっており、内的整合性は十分といえる。

III 結果

1. 分析1：パーソナリティ特性がタッチ性向に及ぼす影響

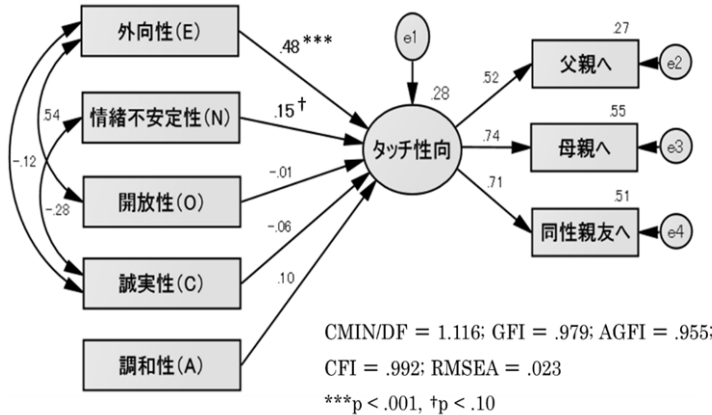
パーソナリティ特性が個々人のタッチ性向に及ぼす影響を検討するために、日本の大学生のデータを用いてAmosを使った共分散構造分析を行った。まず、Big Fiveの5つの特性すべてがタッチ性向に影響を及ぼすことを仮定して探索的な分析を行ったが、開放性、誠実性、調和性からタッチ性向へのパス係数は有意ではなく、外向性($p < .001$)と情緒不安定性($p < .05$)のみがタッチ性向に対して有意なパスを示した(Figure 2)。同様の結果は、韓国の大学生のデータからも導かれ、外向性からタッチ性向へのパス係数($p < .001$)と情緒不安定性からタッチ性向へのパス係数($p < .1$)の2つが有意であった(Figure 3)。

以上のような日韓分析から、文化の違いにも



注) 係数はすべて標準化推定値である。
5つのパーソナリティ特性間の共分散は有意なもののみを残した。

Figure 2 パーソナリティ特性がタッチ性向に及ぼす影響 (日本)



注) 係数はすべて標準化推定値である。
5つのパーソナリティ特性間の共分散は有意なもののみを残した。

Figure 3 パーソナリティ特性がタッチ性向に及ぼす影響 (韓国)

関わらず、パーソナリティ特性のうち、とりわけ外向性がタッチ性向に対して強い正の影響を及ぼすパーソナリティ特性であることを確認することができた。

2. 分析 2：パーソナリティ特性、文化、性別の同時分析

パーソナリティ特性がタッチ性向に及ぼす影響については、日韓ともに有意な結果が得られたが、タッチ性向の水準そのものについては日韓間で事情が異なる。また、日常生活の中で相対的に女子の身体接触行動をよく見かけることから推察されるように、タッチ性向における性差も看過できない要因である。これらの点を明らかにすべく、調査においては、男女比のバランスに配慮するとともに、日本の調査と韓国の調査をほぼ同時期に実施した。タッチ性向における文化差ならびに性差を分析した結果は Figure 4 のとおりである。

Figure 4 に見るように、日韓ともにタッチ性向における性差ははっきりと表れている。日本の大学生の場合、男子7.66 ($SD = 10.93$) に対し、女子は16.66 ($SD = 13.92$) という結果が出ており、男女間には有意差が認められた ($t(200)$

= 5.09, $p < .001$)。一方、韓国の大学生の場合、男子21.50 ($SD = 14.55$) に対し、女子は32.93 ($SD = 16.95$) となっており、日本の場合と同様、タッチ性向には明らかに性差が表れている ($t(210) = 5.21, p < .001$)。

次に、文化差においても顕著な違いが出ている。日本の男子と韓国の男子では、前者の7.66 ($SD = 10.93$) に対し、後者は21.50 ($SD = 14.55$) であり、両者の間に大きな開きがある ($t(192) = 7.50, p < .001$)。女子の場合はさ

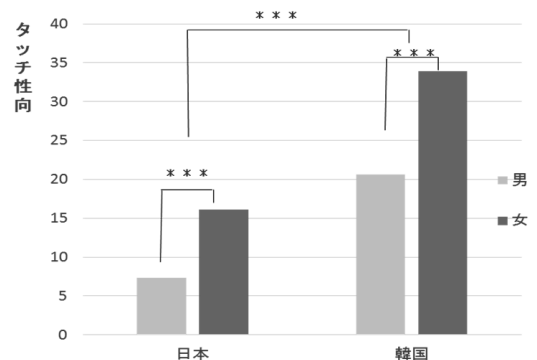


Figure 4 タッチ性向における性差および文化差

らにそのギャップが大きく、日本の女子16.66 ($SD = 13.92$) に対し、韓国の女子は32.93 ($SD = 16.95$) となっており、その差は明らかである ($t(218) = 7.73, p < .001$)。以上から、多くの先行研究において主張されてきた身体接触における文化差ならびに性差が本研究においても検証されたことになる。

それでは、分析1で抽出したパーソナリティ特性のうちの「外向性」と「情緒不安定性」は文化や性別と比較した場合、タッチ性向に対してどの程度の相対的な影響力をもつのであろうか。この分析を行うために、タッチ性向を従属変数とし、文化(日韓)、性別、外向性、情緒不安定性の4つの要因を説明変数とする重回帰分析を行った。なお、従属変数のタッチ性向については、私から父親へのタッチ、私から母親へのタッチ、私から同性親友へのタッチといった3つの対象に対するタッチ得点を単純合計することによって操作化を行った(クロンバツ

ク $\alpha = .68$)。

Table 1とTable 2から分かるように、ステップワイズ法により変数を投入し、そのときの決定係数 (R^2) の変化量を分析すると、文化を投入したときに $R^2 = .21$ だったのが、外向性の投入で R^2 は .12増加し、性別の投入でさらに .07増加している。ただし、ステップワイズ法によると、4つ目の情緒不安定性の変数は有意な説明変数とはならず、分析から除外される結果となった。以上の結果から、タッチ性向を説明する変数として、文化、性別、外向性の3つの変数が有意であること、パーソナリティ特性の1つである外向性は、タッチ性向に及ぼす影響力という観点では文化と性別の中間に位置することなどが示唆された。また、これら3変数を同時に考慮することで、タッチ性向の分散の4割弱が説明できることも明らかとなった ($R^2 = .39, p < .001$)。

Table 1 タッチ性向に関する重回帰分析の結果

	タッチ性向			
	B	標準誤差	β	
文化 (日韓)	14.80	1.32	.43	***
外向性	1.01	.13	.31	***
性別	9.16	1.32	.27	***
R^2 乗	.39			

Table 2 タッチ性向に関するモデルの要約

モデル	R	R^2 乗	推定値の標準誤差	df	R^2 乗変化量	F変化量	
1	.45 ^a	.21	15.23	412	.21	106.49	***
2	.57 ^b	.32	14.11	411	.12	69.23	***
3	.63 ^c	.39	13.37	410	.07	47.89	***

- a. 予測値: (定数), 文化
- b. 予測値: (定数), 文化, 外向性
- c. 予測値: (定数), 文化, 外向性, 性別

IV 考察

本研究は、パーソナリティ特性に関する研究と非言語コミュニケーション手段としての身体接触に関する研究の融合を図るものである。調査結果からは、パーソナリティ特性のうちの外向性と情緒不安定性がタッチ性向に対して有意な影響を及ぼすパーソナリティ特性であることが示された。このような結果は、身体接触研究において人のパーソナリティ特性を考慮することの意義を示唆するものである。これまでの身体接触に関する研究においては、身体接触が非言語コミュニケーション手段の一つとして位置づけられ、主として言語によるコミュニケーションを補完するものとして扱われてきたきらいがある。しかしながら、本研究では、身体接触が人のパーソナリティ特性を表すマーカーとしても機能することを示すことで、身体接触研究の外延拡張の可能性を提示している。

また、日本と韓国の大学生を対象に同様の調査を行い、両調査結果を比較対照することによって文化的要因の影響についても検討を行った。既述のように、パーソナリティ特性からタッチ性向への影響を分析した共分散構造分析からは、いずれの調査においても、Big Fiveのうちの外向性と情緒不安定性がタッチ性向に対してプラスの影響を及ぼしていることが明らかとなった。日韓の文化の違いにも関わらず、パーソナリティ特性がタッチ性向に及ぼす影響についてはある程度の普遍性が認められたと解釈できる (Figure 2 と Figure 3)。このような結果は、日常生活の中でわれわれが抱いていたイメージ、すなわち、外向的で社交的な人ほどタッチ性向も高いというイメージと合致するものであり、そのイメージがデータによって裏付けられたことになる。一方、情緒不安定性からタッチ性向へのパスについては日韓で若干の程度の差が出ているものの (日本, $p < .05$; 韓国, $p < .1$)、この結果については、外向性とは逆の解釈が可能である。すなわち、情緒不安定な人ほどタッチによって精神的な安定を求める傾向

が強いといえよう。外向性の高い人のタッチを能動的な攻めのタッチとすれば、情緒不安定性の高い人のタッチは受動的な守りのタッチとも解釈できる。

一方、タッチ性向の水準については、日本の大学生より韓国の大学生の方が明らかに高いタッチ性向を示しており、文化による違いが浮き彫りになったといえる。同様に、タッチ性向の水準における男女差についても、日韓いずれにおいても有意差がはっきりと表れており (Figure 4)、多くの先行研究の結論を支持する結果となった。本研究の分析結果を踏まえると、例えば、外向的 (パーソナリティ特性) な韓国 (文化) の女子 (性別) は、タッチ性向が非常に高い傾向にあることが予想される。逆に、外向性の低い内向き (パーソナリティ特性) な日本 (文化) の男子 (性別) は、タッチ性向が非常に低い傾向にあることが予想される。このような予想は、日常生活の中で彼/彼女らの実際の身体接触行動を観察しても概ねうなずけるものである。

以上、日韓の文化的要因の影響と関連し、パーソナリティ特性がタッチ性向に及ぼす影響については普遍性が認められる反面、そもそもタッチ性向の水準そのものについては文化差がはっきりと表れた格好となった。日本より韓国の方が身体接触を好む文化であるという一般的な認識 (曹, 2001; 曹, 2008) がデータによって裏付けられたことになる。タッチ性向が自分の生まれ育った文化によって影響されるとすれば、身体接触に関する今後の研究においては、文化的要因を如何にコントロールしていくかというのが大きな課題となろう。本研究では、タッチ性向を説明する要因として文化、性別、パーソナリティ特性の3つの要因を取り上げたが、文化についてはとりわけ注意が必要である。先行研究において、日本と韓国はともに非接触文化圏に分類されているが、それにも関わらず本研究では日韓の文化差によってタッチ性向の分散の2割強が説明できるという結果が出ている。仮に、日本のデータと接触文化圏と

いわれる国のデータとを比較した場合には文化の異質性が一層拡大され、両国の文化差がタッチ性向を説明する割合はさらに高まることが予想される。そのため、文化差によってタッチ性向が説明される割合にどの程度の差が生じるかを分析することで、文化間の距離を測る新たな尺度とすることも可能と考えられる。

また、感情研究との関連も検討すべき課題の一つである。パーソナリティ特性がタッチ性向に影響を及ぼす場合にも、その時々個人の感情状態によって人の身体接触行動に変化が見られる可能性があるため、感情変化に伴い身体接触行動がどのように変化するかを明らかにすることも身体接触行動を正しく理解する上で重要であると考えられるからである。

最後に、本研究の貢献として、身体接触(タッチング)研究とパーソナリティ研究とをリンクさせたこと、パーソナリティ特性のうちの外向性と情緒不安定性がタッチ性向と関連していることを明らかにしたこと、先行研究で取り上げられてきた文化と性別がタッチ性向をどの程度説明しているかを数値で示したことが挙げられる。今後、パーソナリティ特性とタッチ性向を巡る議論をさらに深めていくには、関連研究のさらなる蓄積が望まれる。

【付 記】

本研究は、平成23-25年度科学研究費基盤研究C、課題番号23520727(研究代表、曹美庚)と平成26-28年度科学研究費基盤研究C、課題番号26503016(研究代表、曹美庚)の助成を受けた。

注

- 1) 本研究の一部は、2013年度日本心理学会第77回大会と2013年度 *Korean Psychological Association Conference* にて報告された。
- 2) 詳細については、辻(1998)、村上・村上(1997, 2008)、和田(1996)、Goldberg(1990, 1992)、McCrae & Costa(1987)などを参照されたい。
- 3) Crede et al.(2012)は、これまでに公表された8つのBig Five短縮版を対象に、短縮版を用いる利便性と、短縮版を用いることで増加するType I error・Type II errorの発生可能性間のトレードオフ関係を分析している。

- 4) Crede et al.(2012)では、短縮版の妥当性を検討し、項目の数が少なすぎる短縮版は望ましくないものの、適量の項目数を持つ短縮版であれば妥当性に問題はないとした。
- 5) Jourard(1966)の分類のうち、目・鼻・口・耳の4つの部位を一つに、首の前と後ろを一つに、大腿部の前と後ろを一つに、脚の前と後ろを一つにそれぞれ統合し単純化することによって、回答者の利便性を高めた。
- 6) 異性親友との身体接触には、性的な意味合いが含まれている可能性が高く、その他の対象との身体接触とはやや異質であった。そこで、より一般的な身体接触行動を究明するという本研究の趣旨に照らし、異性親友との身体接触行動は分析から除外することにした。
- 7) Jourard(1966)の身体接近度スケールについては、Barnlund(1973)も指摘しているように、身体接触を鋭敏に確実に測定できる方法であることが立証されており、その後の研究においても多くの研究者によって援用されている(e.g., Rosenfeld et al., 1976; Nguyen et al., 1976; Hutchinson & Davidson, 1990)。

引用文献

- App. B, McIntosh, D. N., Reed, C. L., & Hertenstein, M. J. (2011). Nonverbal Channel Use in Communication of Emotion: How May Depend on Why. *Emotion*, 11, pp. 603-617.
- Barnlund, D. C. (1973). *Public and Private Self in Japan and United States*. Simul Press, (西山千(訳)(1973).『日本人の表現構造』サイマル出版会)
- Barnlund, D. C. (1975). Communication styles in two cultures: Japan and the United States. In A. Kendon, R. M. Harris, & M. R. Key (Eds.), *Organization of Behavior in Face-to-Face Interaction*. The Hague: Mouton.
- Boderman, A., Freed, D. W., & Kinnucan, M. T. (1972). Touch me, like me: Testing an encounter group assumption. *Journal of Applied Behavioral Science*, 81, pp. 527-533.
- Buck, R. (1979). Individual differences in nonverbal sending accuracy and electrodermal responding: The externalizing-internalizing dimension. In R. Rosenthal (ed.), *Skill in nonverbal communication: Individual differences*. (pp. 140-170), Cambridge, Gunn & Hain.
- 曹美庚(2001).「日本人と韓国人の異文化コミュニケーション」『人間環境学入門』中央経済社 pp. 100-109.
- 曹美庚(2008).「スキンシップ許容度とコミュニケーション

Mar. 2016

パーソナリティ特性とタッチング行動の関連性に関する研究

- シヨン距離—日本人大学生の分析結果を中心に—」『言語文化論究(九州大学大学院言語文化研究院)』23, pp. 43-61.
- 曹美庚(2010).「対人関係における親密さとスキンシップ許容度—韓国人大学生の分析結果を中心に—」『比較社会文化(九州大学大学院比較社会文化学府)』16, pp. 1-14.
- 曹美庚・釘原直樹(2013).「パーソナリティ特性がタッチ性向に及ぼす影響—日本人大学生の調査から—」『日本心理学会第77回大会発表論文集』77, 19.
- Cho, M., & Kugihara, N. (2013). The impact of the Big Five personality traits on the propensity to touch: based on a survey of university students in Korea. *Korean Psychological Association conference book*, p. 5.
- Crede, M., Harms, P., Niehorster, S., Gaye-Valentine, A. (2012). An Evaluation of the Consequences of Using Short Measures of the Big Five Personality Traits. *Journal of Personality and Social Psychology*, 102, pp. 874-883.
- DiBiase, R., & Gunnoe, J. (2004). Gender and culture differences in touching behavior. *The Journal of Social Psychology*, 144, pp. 49-62.
- Dorros, S., Hanzal, A., & Segrin, C. (2008). The Big Five personality traits and perceptions of touch to intimate and nonintimate body regions. *Journal of Research in Personality*, 42, pp. 1067-1073.
- Goldberg, L. R. (1990). An alternative “description of personality”: The Big-Five factor structure. *Journal of personality and Social Psychology*, 59, pp. 1216-1229.
- Goldberg, L. R. (1992). The development of markers for the big-five factor structure. *Psychological Assessment*, 4, pp. 26-42.
- Hall, E. T. (1966). *The Hidden Dimension*. 2nd ed. Gardner City, NY: Anchor Books.
- Hall, J. A., & Friedman, G. B. (1999). Status, gender and nonverbal behavior: A study of structured interactions between employees of a company. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25, pp. 1082-1091.
- Henley, N. M. (1973). Status and sex: Some touching observations. *Bulletin of the Psychonomic Society*, 2, pp. 91-93.
- Henley, N. M. (1977). *Body politics: Power, sex, and nonverbal communication*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Hutchinson, K. L., & Davidson, C. A. (1990). Body accessibility re-revisited: The 60s, 70s and 80s. *Journal of Social Behavior & Personality*, 5, pp. 341-352.
- Jourard, S. M. (1966). An exploratory study of body-accessibility. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 5, pp. 221-231.
- Jourard, S. M., & Rubin, J. E. (1968). Self-disclosure and touching: A study of two modes of interpersonal encounter and their inter-relation. *Journal of Humanistic Psychology*, 8, pp. 39-48.
- Lustig, M. W., & Koester, J. (1996). *Intercultural competence: Interpersonal communication across cultures*. 2nd ed. New York: Harper Collins.
- McCrae, R. R., & Costa, P. T., Jr. (1987). Validation of the five-factor model of personality across instruments and observers. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, pp. 81-90.
- Mazur, A. (1977). Interpersonal spacing on public benches in contact vs. noncontact cultures. *The Journal of Social Psychology*, 101, pp. 53-58.
- 村上宣寛・村上千恵子(1997).「主要5因子性格検査の尺度構成」『性格心理学研究』6, pp. 29-39.
- 村上宣寛・村上千恵子(2008).『主要5因子性格検査ハンドブック—性格測定的基础から主要5因子の世界へ(改訂版)』学芸図書.
- 並川努・谷伊織・脇田貴文・熊谷龍一・中根愛・野口裕之(2012).「Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討」『心理学研究』83, pp. 91-99.
- Nguyen, T. D., Heslin, R., & Nguyen, M. L. (1975). The meaning of touch: Sex differences. *Journal of Communication*, 25, pp. 92-103.
- Nguyen, M. L., Heslin, R., & Nguyen, T. D. (1976). The meaning of touch: Sex and marital status differences. *Representative Research in Social Psychology*, 7, pp. 13-18.
- Paulsell, S., & Goldman, M. (1984). The effect of touching different body areas on prosocial behavior. *Journal of Social Psychology*, 122, pp. 269-273.
- Remland, M. S., Jones, T. S., & Brinkman, H. (1995). Interpersonal distance, body orientation, and touch: Effects of culture, gender, and age. *The Journal of Social Psychology*, 135, pp. 281-297.
- Roese, N. J., Olson, J. M., Borenstein, M. N., Martin, A., & Shores, A. L. (1992). Same-sex touching behavior: The moderating role of homophobic attitudes. *Journal of nonverbal behavior*, 16, pp. 249-259.
- Rosenfeld, L. B., Kartus, S., & Ray, C. (1976). Nonverbal communication: Body accessibility revisited. *Journal of Communication*, 26, pp. 27-30.
- Salt, R. E. (1991). Affectionate touch between father

- and preadolescent sons. *Journal of Marriage and the Family*, 53, pp. 545-554.
- Schmitt, D. P., Realo, A., Voracek, M., & Allik, J. (2008). Why can't a man be more like a woman? : Sex differences in Big Five personality traits across 55 cultures. *Journal of Personality and Social Psychology*, 94, pp. 168-182.
- Schutte, N. S., Malouff, J. M., & Adams, C. J. (2001). A self-report measure of touching behavior. *Journal of Social Psychology*, 128, pp. 597-604.
- Stier, D. S., & Hall, J. A. (1984). Gender differences in touch: An empirical and theoretical review. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, pp. 440-459.
- Thayer, S. (1988). Close encounters. *Psychology Today*, 22, pp. 31-36.
- 辻平治郎 (1998). 『5 因子性格検査の理論と実際—こころをはかる 5 つのものさし—』北大路書房.
- 和田さゆり (1996). 「性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成」『心理学研究』67, pp. 61-67.
- Whitcher, S. J., & Fisher, J. D. (1979). Multidimensional reaction to therapeutic touch in a hospital setting. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, pp. 87-96.

(2015年11月20日掲載決定)